

第33回

# 日本臨床皮膚科 医会総会・ 臨床学術大会

33<sup>rd</sup>  
J OCD 2017 KOBE

The 33rd Annual Meeting of  
Japan Organization of  
Clinical Dermatologists

ランチョンセミナー 13

座長 **山田 秀和** 先生

近畿大学アンチエイジングセンター 副センター長  
近畿大学医学部 奈良病院 皮膚科教授

01

キレイが実感できる  
痤瘡治療と  
漢方薬の深い関係

演者

**野本 真由美** 先生

野本真由美スキンケアクリニック  
院長

02

漢方薬による  
囊腫性ざ瘡の治療

演者

**黒川 一郎** 先生

明和病院 皮膚科部長・  
にきびセンター長

日時

2017年4月23日

SUN

12:30 → 13:30

会場

**ANAクラウン  
プラザホテル神戸**  
第6会場 9F ラベンダー

神戸市中央区北野町1丁目

共催：第33回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会  
クラシエ薬品株式会社

# キレイが実感できる 痤瘡治療と漢方薬の 深い関係

## 演者 野本 真由美 先生 野本真由美スキンケアクリニック 院長

新潟県立新潟高等学校卒業  
1998年 3月 信州大学医学部卒業  
1998年 4月 新潟大学医学部付属病院皮膚科 勤務  
2006年 3月 〃 退職  
2006年 4月 美容皮膚科の勉強のため、米国留学  
2007年 6月 野本真由美スキンケアクリニック開院

日本皮膚科学会認定 皮膚科専門医  
日本抗加齢医学会専門医  
日本東洋医学会認定 漢方専門医

日本には古来より、生体のバランスを整えて自然治癒力を高めることを得意とする漢方医学があり、この分野を痤瘡治療に取り入れると、従来薬の治癒効果がより安定したり、副作用を回避しやすくなることをしばしば経験する。痤瘡に使われる漢方薬はさまざまであるが、当院では思春期後痤瘡の女性患者に対して桜皮配合の「十味敗毒湯」を中心に治療を行い、約8割の患者で効果がみられている。この桜皮配合の十味敗毒湯には従来から知られている抗菌作用に加えて、エストロゲン様作用、皮脂分泌の抑制作用、抗酸化作用、さらには創傷治癒を早める作用など、痤瘡治療の新たな作用メカニズムが解明されてきている。近年、過酸化ベンゾイルの登場により痤瘡治療の幅が広がったが、一方で皮膚刺激症状により治療が継続できないこともある。過酸化ベンゾイルやアダバレンの皮膚刺激をコントロールすることは今後の痤瘡治療の課題の一つであるが、十味敗毒湯は古来より皮膚炎にも効果があることが知られているため、こうした外用剤による刺激性接触皮膚炎も同時に軽減する可能性が高い。また、痤瘡は多因子疾患であるため、標準治療だけでは治療に難渋することがある。今回は痤瘡の増悪因子を、1.肌のバリア機能低下タイプ、2.皮脂分泌過剰タイプ、3.性ホルモンバランス異常タイプ、4.消化管トラブルタイプ、5.ストレス過剰タイプ、の5つに分類して、それぞれのタイプに応じた漢方薬の選び方について紹介する。

# 漢方薬による 囊腫性ざ瘡の 治療

## 演者 黒川 一郎 先生 明和病院 皮膚科部長・にきびセンター長

1983年 関西医科大学卒業  
関西医科大学皮膚科研修医  
1986～88年 ベルリン自由大学留学 (Research fellow)  
1988年 関西医科大学大学院卒業 (皮膚科) 医学博士 学位取得  
関西医科大学皮膚科 助手  
1989年 大阪府済生会中津病院皮膚科 医員  
2004年 兵庫県立塚口病院皮膚科 部長  
2005年 4月 三重大学大学院医学系研究科 病態解明医学講座 皮膚医学分野 講師  
11月 三重大学大学院医学系研究科 病態解明医学講座 皮膚医学分野 助教授  
2007年 4月 三重大学大学院医学系研究科 病態解明医学講座 皮膚医学分野 准教授  
2011年 1月 明和病院皮膚科 部長  
4月 兵庫医科大学臨床教育教授  
7月 明和病院 にきびセンター長  
2016年 11月 明和医学研究所 所長

尋常性ざ瘡治療ガイドラインにおける漢方療法のエビデンスは現状では低い。炎症性皮疹については荊芥連翹湯、清上防風湯、十味敗毒湯が推奨度:C1、黄連解毒湯、温清飲、温経湯、桂枝茯苓丸が推奨度:C2とされている。また、面皰については荊芥連翹湯が推奨度:C1、黄連解毒湯、十味敗毒湯、桂枝茯苓丸が推奨度:C2とされている。内服抗菌剤についてはミノマイシンではめまい、嘔気、頭痛などの副作用が出ることがあり、このような場合に漢方薬の内服が選択肢として用いられる。漢方薬の利点として、副作用が少ない点があげられる。ざ瘡の特殊型に囊腫性ざ瘡があり、治療に難渋する疾患である。囊腫性ざ瘡の発症機序については明らかではないが、欧米ではイソトレチノインが治療として用いられている。本邦ではイソトレチノインが使用できないため、治療に困難を要する。今回、柴苓湯に注目し、囊腫性ざ瘡の治療を試み、良好な効果が得られたので報告する。柴苓湯はステロイド様作用、免疫調整作用、線維芽細胞増殖抑制作用、活性酸素、凝固系の抑制、マクロファージ、好中球の浸潤抑制、血管内皮細胞の活性化抑制作用などが報告されている。柴苓湯が囊腫性ざ瘡に対して、どのような作用機序で改善をもたらしたかは今後の検討課題である。また、柴苓湯の副作用として、低K血症、肝機能障害、間質性肺炎、手足のふるえなどに十分注意をしながら、投与すべきである。漢方薬についてはその有効性のエビデンスは低い、ざ瘡治療として、有用な薬剤の選択肢の1つである。今後、漢方薬についてその作用機序が基礎的な研究から明らかにされ、尋常性ざ瘡の治療の発症病態の解明につながることを期待したい。